

3-5 考察

調査期間中(9~4月),種子,果実の占有率のピークが9月と最も早く現れたが,これは各食物項目に多く含まれていたイネ,カキが9月に実るためである.また,双子葉植物の葉や茎の占有率は10月まで高くその後減少したが,これにはマメ科などの落葉性草本が含まれており,冬に向かうにつれその利用可能量が減少していったためと考えられる.続いて堅果類と動物質の占有率が10,11月にピークを迎えた.当地域には堅果供給樹種としてコナラ,アベマキ,クヌギ,スダジイ,アラカシ,ウラジロガシ,シラカシ,アカガシが生育している.これらのうち,コナラ,クヌギ,スダジイ,アラカシ,シラカシは10,11月に健全種子が最も多く落下する(松山,1982;橋詰,1987)が,これは堅果類占有率のピークと一致している.そのため,堅果類占有率の季節的变化は,その利用可能量を反映していたと考えられる.動物質ではアマガエルとアオガエル科のカエルが多く確認されたが,カエルは20℃を下回ると活動が鈍り,徐々に冬眠へ移ることが報告されている(相賀,1974).調査地の平均気温は10月以降20℃を下回る(宮脇,1983)ため,活動が鈍ったカエルを捕獲しやすくなったと考えられる.12月以降に動物質の占有率が減少したのは,地温の低下によりカエルが地中深く潜っていき(Breckenridge & Tester, 1961),捕食が困難になったためと考えられる.他地域ではミミズがイノシシの重要な食物となっている(Fournier-Chambrillon et al., 1995)が,本調査では少

なかった。これはミミズの消化速度が速く、今回用いた分析方法ではその占有率が過小評価されやすいため(Fournier-Chambrillon et al., 1995)と考えられる。このことを考慮すると動物質の占有率は本結果よりも高くなる可能性がある。

冬に向かうにつれて根・塊茎の占有率が増加したが、この傾向は他地域でも報告されている(Genov, 1981; Kanzaki & Ohtsuka, 1991; Eriksson & Petrov, 1995)。根・塊茎の採食量の増加は、双子葉植物や種子、果実、堅果類など地上性の食物や地表近くで採取できる動物質の利用可能性が、冬期に減少していったために生じたと考えられる。

占有率に季節的変化がみられなかった単子葉植物にはイネの茎とササの葉が確認された。イネの茎は刈り取りが終わる9月以降には利用可能性が少なくなる。しかし、当地域に分布しているネザサ(*Pleiolabrus variegatus*)とチマキザサ(*Sasa paniculata*)は常緑性であるため(牧野, 1961)、調査期間中の利用可能性は大きく変化しないと考えられる。樹皮もまた利用可能性が変化するとは考えにくい。そのため単子葉植物と樹皮の占有率に季節的変化がみられなかったのであろう。しかし、ササの葉や樹皮にはセルロース、ヘミセルロースが多く含まれており(Yokoyama et al., 2000)、イノシシにとっては消化が困難である(Baber & Coblenz, 1987)ため、重要な食物とは考えにくい。繊維質にも季節的変化が認められなかったが、これは単子葉植物や双子葉植物、根・塊茎などさまざまな植物種や部位を起源に持つものを区

別できず、1つにまとめたことが原因と考えられる。

以上より、本調査地域ではニホンイノシシは雑食性を示すこと、食物の利用可能量に応じて食性に季節的变化が見られることが明らかになった。同様のことは他地域でも報告されている(Matschke, 1967; Henry & Conley, 1972; Barret, 1978; Wood & Roark, 1980; Genov, 1981; Howe et al., 1981; Baber & Coblentz, 1987; Wlazelko & Poznan, 1992; Groot Bruinderink et al., 1994; Eriksson & Petrov, 1995; Fournier-Chambrillon et al., 1995)。

9月から10月に急増し、その後2月まで減少する胃内容物の%CFの季節的变化は、堅果類と動物質の占有率のそれと類似していた。このうち堅果類は脂肪を豊富に含有する(Matschke, 1967; Barrett, 1978)ため、その採食量が%CFの増減に影響していたと考えられる。%CPと同様の季節的变化を示す食物項目はなかったが、タンパク質を多く含有する食物としては動物質や双子葉植物があり(Nagy & Haufler, 1980)、これら複数の項目が%CPの季節的变化に影響していると考えられる。食物中のタンパク質含有量が少ない場合、脂肪や炭水化物の消化吸収が阻害され、得られる可消化エネルギー量は減少する(Barrett, 1978)。イノシシを家畜化したブタでは食物中の%CPが12%以下に減少すると消化吸収阻害が生じる(National Research Council, 1979)。本調査では、2月を除き%CPが12%を超えていたので、%CPの低下による脂肪の消化吸収阻害は発生していなかったと考